

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『たくらみと恋』 : 精緻に織られたテキスト
Author(s)	武田, 智孝
Citation	広島ドイツ文学 , 35 : 43 - 62
Issue Date	2023-02-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053551">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053551</a>
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



# 『たくらみと恋』 — 精緻に織られたテキスト

武田 智孝

## はじめに

以下は、フェルディナントがなぜ無謀な身分差結婚に執拗に挑み続けるのか、なぜ彼が偽手紙のお粗末な畏に(一見)易々と掛かってしまうのか、不幸な恋人たちの心中(gemeinsamer Liebestod)は成立したか、という主に三つの疑問(特に第二の疑問)を、シラーの緻密に構成されたテキストから読み解こうとする試みである。

## 1. フェルディナントは何故無謀な身分差結婚に執着するのか？

『たくらみと恋』 — だが、問題は恋というより結婚。18世紀後半ドイツ小公国の宰相フォン・ヴァルター男爵の一人息子フェルディナント少佐と貧しい音楽師の一人娘ルイーゼ・ミラーとの身分差恋愛結婚、これが問題あり、「たくらみ」はその結婚を阻止するためのものである。身分差恋愛というだけなら、同時代の文学に多く描かれているとおり、町娘が貴族の青年に誘惑されて妊娠、捨てられて子殺し、斬首、あるいは自殺、狂気...というのがお定まりの筋書き、ルイーゼの父親が開幕早々気を揉んで、かみさんにぼやいているのもそのことである。(I.1)<sup>1</sup> 市民の側からは悲劇だが、貴族にとってはひと時のお楽しみに過ぎず、わざわざ「たくらみ」をめぐるして邪魔立てする必要などない。ところがフェルディナントは町娘の純潔を汚すことなく、恋愛を正式な結婚において成就しようとしているのである。

若い二人の相思相愛ぶりは第I幕第3場と第4場における両人の台詞を聞けば誰も疑う者はいないだろう。ヴェルテルに代表される恋愛至上主義、「世俗化された宗教」としての恋愛、「恋愛の聖化」といったことの問題性が指摘されるのは当然かもしれない。<sup>2</sup> だがそういう解釈はこの身分差結婚に潜む「父」からの息子の逃走、あるいは、「父」に対する息子の反逆という因子を軽視することになる。

第I幕第4場に登場して早々にフェルディナントはルイーゼに「僕は宰相の息子、だから

---

<sup>1</sup> *Kabale und Liebe*. In: Schiller, Friedrich, *Sämtliche Werke*. Band I. München 1987. ( )内のローマ数字とアラビア数字は同劇の第何幕、第何場かを示す。

<sup>2</sup> „Die Tragödie der Säkularisation oder genauer der Sakralisierung der Liebe.“ Vgl. Guthke, Karl S.: *Schillers Dramen. Idealismus und Skepsis*. 2. erweiterte und bearb. Auflage. Tübingen 2009, S. 106.

こそなんだ (Ich bin des Präsidenten Sohn. Eben darum.)。僕の父は不当なやり方で国から暴利を得た、その呪いを息子の僕が受け継ぐ、僕の 禍<sup>わざわい</sup> を誰が和らげてくれるというのだ、愛する君以外の誰が?」[傍点・強調引用者](I.4) と言っている。庶民の娘と結婚すれば貴族社会から締め出しを食らい、<sup>3</sup> 穢れた遺産の相続を免れることができる。真摯な恋の情熱に疑いを容れる余地はないものの、身分違いの結婚によって彼は父親(権力)の圏域からの逃走を企てているのである。これが更に明らかになるのは、第I幕第7場の父子対決の場面。きっかけは政略結婚だが、重要な争点は家督相続である。息子の目指す身分差結婚が相続放棄を意味することを父子ともに承知している。前任者を亡き者にしてまで道を切り拓いてやったのはひとえにお前のため、良心の痛みも罪も罰もすべて自分が負う、お前は自らが手を汚したわけではない成果を受け取るだけで済むのだと父は言い、「忌まわしい父上の思い出がこびりついた遺産など慎んでご辞退申し上げます」(I.7) と息子は拒絶する。この身分差結婚には真摯な恋の因子とともに息子による父親((汚れた権力)忌避というファクターが組み込まれている。

父子の対話の中で一度だけ Friederike von Ostheim 伯爵令嬢のことが話題に上る。<sup>4</sup> 彼女が身分においても品性においても「非の打ちどころのない (untadelhaft)」(I.7) 花嫁候補であることはフェルディナントも認めている。冷静に判断すれば、このような姫君をこそ結婚相手に選ぶべきであろう。その程度の分別が彼に欠けていたとは思えない。しかし、もし伯爵令嬢と結婚すれば、呪われた遺産を受け継ぎ、穢れた宮廷社会で父親の敷いた権力強化路線を歩まねばならない。ルーゼへの真摯な愛に疑いを挟む余地はないものの、身分違いの結婚によって彼は(少なくとも意識下において)父(権力)の圏域からの逃走を企てているのである。

ただこれが唯一の正しい道というわけではない。第二幕で父親に命じられて政略結婚の相手であるメトレッセ(領主の愛妾)にしぶしぶ会いに行ったフェルディナントは、彼女の口から語られる壮絶な半生に衝撃を受ける。穢れた権力から逃げる事しか念頭にない青年は、墮落した宮廷のただ中に身を置きながら誇りを失わず、腐敗した権力と戦う生き様に打ちのめされる。ひと時の間「僕の愛が僕の良心の前に色あせた(meine Liebe vor meinem

---

<sup>3</sup> シラー劇の重要なプレテクストの一つとされる『エミーリア・ガロッティ』でマリネリは、アッピアーニ伯が「財産もなければ身分もない娘(エミーリア)」と結婚することで「上流貴族社会の門戸は今後(彼に対して)閉ざされる」と言っている。伯爵はもともと、腐敗した宮廷社会を忌み嫌っており、これは想定内のことで、結婚後には都を捨てて、自らの領地ピエモンテの峡谷に新妻を伴って帰る予定であった。その点アッピアーニ伯はフェルディナントの先駆けと言える。これまたプレテクストの一つとされる Gemmingen の *Der deutsche Hausvater* でも、町の貧しい画家の娘と結婚することになる貴族の息子は宮廷への出仕をすべて辞さねばならない。貴族にとって身分差結婚は意図するとならないにかかわらず社会的自殺行為なのである。

<sup>4</sup> 父親の勧める政略結婚の相手(領主の愛妾)を、穢れているという理由で息子が拒否するので、文句のつけようのない伯爵令嬢を持ち出して、結婚したい恋人がいるという本音を吐かせるのである。

Gewissen erblaßte), 僕のルイーゼが僕にとってのすべてではなくなった」[傍点・強調引用者] (II.5)と彼は後に告白している。メトレッセの成熟した色香の前にルイーゼの純朴な美しさが色褪せたという意味ではない。そのことは Liebe と Gewissen の対比から明らかである。腐敗した権力から逃げることなく戦うという生き方が彼のもう一つの選択肢であることに改めて気付かされた、ということだ。しかし悪政を糾そうと孤軍奮闘したレディ・ミルフォードですらついにはフェルディナントと手に手を取って逃亡することを夢見るほどなのだ。(II.1) そして実際彼女は最後にはすべてを捨てて公国を去るのである。(IV. 8,9) 専制主義的宮廷社会墮落の闇がそれほどまでに深いとなれば、逃げる青年をむやみに批判することは控えるべきかもしれない。

## 2. 「たくらみ」 — 偽の恋文

フェルディナントの目指す身分差結婚が「父」の圏域、権力中枢からの逃走を意味する以上、権力志向のフォン・ヴァルター男爵が息子の企てを阻止すべくふり構わぬ反撃に出るのは当然である。彼は息子のために既に政略結婚を用意している。

折から領主が正室を迎えるにあたって、これまで続けてきたメトレッセとの繋がりを清算しておく必要がある。領主はしかしこの愛妾に未練がある。身近に住ませ、これまで通りの関係を秘かに続けたい。誰か余の愛人を娶ってくれる者はおらぬか。引き受けてくれるならば余の寵を得、出世を約束しようぞ、という次第。<sup>5</sup> このいかがわしい花婿ポストこそ倅フェルディナントにと宰相が狙いを定めているものである。その座を他人に奪われると権力基盤が揺らぎ、一族の繁栄に影が差す。これは宮廷における権力闘争の一環であり、一家の命運はその首尾如何に懸かっている。

男爵は問答無用の戦略を仕掛けて、先ず息子とメトレッセとの婚約を既成事実として公表し、情報を公国中に拡散する。もし息子が拒否すれば、お上の発表は虚偽だったことになり、領主の愛妾が天下に恥をさらすことになる。ノーとは言わせない態勢を先ず作っておいて息子と呼び出す。息子の反発は必至であるが、その際の父子の問答：

父宰相：青二才めが、気でも狂うたか。分別ある人間なら、ある第三の場所をご領主様と交互に占めるという光栄を熱望いたさぬ者などおらぬわ。

息子：(中略)それを光栄と言われますか。君主といえども獣(けだもの)同然になり果てる場所を共有する、それを光栄と？ (I.7)

「ある第三の場所」、主君が欲望する対象を手に入れ、求めに応じて貸し出す、これによっ

---

<sup>5</sup> このような例は実際に存在したという。Alt, Peter-André: *Schiller. Eine Biographie*. Band 1. 1759-1791. München 2000, S. 365.

て文字通り貸しを作り、権力強化に繋げるのである。<sup>6</sup>

息子の意志が固いと見るや宰相は悪知恵に長けた秘書ヴルムを呼び出す。「少佐のようなお方は恋においてと同じくらい嫉妬においても手が付けられない。あの娘の不実を疑わせるのです、事実であろうとなかろうと構いません、ほんの一つまみの疑念で十分、破壊的効果は観面ですよ」(III.1) まずルイーゼの両親を、ご領主様の名代たる宰相に向かって暴言を吐いた廉で不敬罪を適用して逮捕拘禁し、裁判にかければ死刑になるかもしれない(Halsprozeß)と孝心篤い純朴な娘を脅し、釈放してほしいければ第三者宛に恋文を書けと迫り、それをフェルディナントに拾わせる、という戦略である。名宛人は、この政略結婚の成否にクビが懸かっている侍従長を口説いて承諾させる。(III.1)

「あの娘には致命的な弱みが二つある、父親と少佐殿(フェルディナント)です、そこを突いてあの娘の良心(孝心)に訴えるのです」(III.1)とヴルムは言っている。恋人を選んで父親を見捨てるか、父親を救うために恋を諦めるか。孝心篤い娘が父親を見限るはずがないと睨んだ上での作戦である。策士の読み通りルイーゼは父親を護るために恋人を「裏切る」。

計略が成功するためには条件が二つ、一つは内幕がばれると失敗するので、秘密の保持が肝要。宰相の秘書ヴルムは偽手紙の口述筆記が終わるとルイーゼに、手紙は強制されて書いたものではないと神かけて誓わせる(das Sakrament darauf nehmen, diesen Brief für einen freiwilligen zu erkennen)。(III.6)

ヴルム: 一家全員がこの狂言(Betrug)を受け入れ、事実を口外しないと厳かに誓う(einen körperlichen Eid)まで、両親の釈放はないのです。

宰相: 誓うだと? 誓ったところで何になる、馬鹿者め?

ヴルム: そりゃ私たちの間では誓いなんぞ紙くず同然でございましょう、閣下。しかし下々の者どもにおきましては誓いは盤石の重みをもつのでございます。

[傍点引用者](III.1)

シラーはこの風刺的対話を書きたかった。もう一つの眼目は「神かけての誓い」に呪縛される信仰心篤い町娘のいたましい愚直さを描いて、素朴な無知の危うさを指摘したかった。これは第Ⅴ幕第1場で彼女が心中を決意するところに出て来る。その際に改めて述べる。

第二の問題は、このような茶番にフェルディナントがそう易々と引っかかるか、である。

この部分に関してシラーがモデルにしたのは『オセロ』である。<sup>7</sup> オセロの疑念を高めたのはカシオが手にしているデズデモナのハンカチだった。しかしこの小物はきっかけに過ぎない。カシオは若い白人の士官である。オセロには自分が黒人であるという負い目があっ

<sup>6</sup> 注釈によれば、「性的なものを暗示、公言をはばかられる身体の一部を指すとも取れる」Schafarschik, Walter: *Friedrich Schiller. Kabale und Liebe. Erläuterungen und Dokumente*. Stuttgart 2008, S. 27.

<sup>7</sup> Luserke-Jaqui, Mattias.: *Schiller Handbuch, Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart: Metzler 2011. S. 79.

た。いくら華々しい戦果を挙げた名将とはいえムーア人である自分のような者が美しい白人の高貴な女を妻として娶るなど分不相応ではないか、という引け目が彼にはあった。意識下に蟠っていたほとんど疚しさにも似た劣等感こそが彼を狂気の嫉妬妄想へと駆り立てる原動力となったのである。

一方フェルディナントは成熟した女性レディ・ミルフォードをも惹きつけるほどの魅力を備えた青年貴族とされている。引け目を感じる理由など見当たらない。そのうえ偽手紙の宛先は劇中随一の喜劇的人物カルプ侍従長である。彼が恋文を本物と思い込むには、何かよほどの前提、根拠と呼べるものがなければならない。

ヴルムは「少佐のような方は恋においてと同じくらい嫉妬においても手が付けられない」と言い、更に「ご子息はあまりにもお若く情熱家でいらっしゃる、計略の曲がりくねった道筋など好みじゃないのです」(III.1)と言っている。要するに青年の一途な恋の情熱と、知識はあるが人生経験に乏しいナイーブさに賭けているのだが、偽手紙を拾った(拾われた)青年将校は策士の思惑通り手紙を本物と思い込む。ヴルムの挙げている理由だけではたして観客や読者は納得するだろうか。彼のような青年がなぜかくもお粗末な罠に易々と引っ掛かってしまうのか、という疑問は容易には消えない。

ここがこのシラー劇のクオリティーが問われ、信憑性が揺らぎかねない最大の難所である。大方はフェルディナントを批判する。ヴルムによる指摘の他に、熱狂的恋愛至上主義者の性急な思い込みの烈しさとか、独占欲とか、貴族的傲慢などが指摘される。<sup>8</sup> はたしてそうか。

### 3. 何故フェルディナントは罠に掛かるか？ (i) すれ違う恋人たち

身分差結婚が現実のものになると、フォン・ヴァルター男爵家は跡継ぎを失い、権勢は地に墮ちる。宰相は権力の維持強化のためには断固これを阻止し、自らが計画する政略結婚を成立させねばならない。息子の反対に遭って(I.7)逆上した宰相はミラーの家に踏み込み、ルイーゼを「売女(Hure)」(II.5)と罵り、これに抗議した家長ミラーに向かって、「このような輩がわしの計画をぶち壊し、父子の仲を裂く、これがただで済むと思うか？ — えい、呪われるがいい！ お前たちを破滅させて恨みを晴らす、父親も母親も娘も一家残らずわしの燃え盛る復讐の生贄にしてくれる」[傍点引用者](II.6) 居合わせたフェルディナントが堪りかねて父親の耳元に口を寄せ、権力篡奪の秘密を暴露するぞと脅しを掛けるに及んで、ようやく宰相は引き下がる。しかし父親の威嚇は口先だけではない。

その前の第一幕でフェルディナントは父親に「偉大とか幸福とかについて私は父上とはまったく考えが違います。貴方の幸福は他人の破滅によってしか得られない。高貴な支配者の笑顔を映す鏡の裏側には妬み、恐怖、呪いが渦巻いている。(中略)私の理想とする幸福はもっと慎ましく私の胸の中にあり、私の望みはすべてこの心の中に収められているの

---

<sup>8</sup> Guthke, a.a.O., S. 106; Alt, a.a.O., S. 368 usw.

です」[傍点引用者][斜字体は原文に拠る](I.7) と啖呵を切って見せた。ところが彼自らの「理想とする幸福」も父親の権力意志と衝突することによって、「胸の中」「心の中」には収まり切らず、恋人の一家を「破滅」させることと引き換えにしか得られなくなるのである。

恋人たちは選択を迫られる。ルイーゼにとっては、宰相の復讐から家族（父親）を護るために恋を諦めるか否か、選択は明快である。それでも彼女はほとんど最後まで両極の間で揺れる。だがフェルディナントにとって状況はより複雑だ。ミラー一家安泰のためにはルイーゼを諦めるべきであろう。だがそれは、いかがわしい政略結婚を受け入れて、血塗られた遺産を引き継ぎ、墮落した宮廷貴族社会で生きて行くことを意味する。これは耐え難い。他人の安全安寧より自分の都合を優先するというのは確かにエゴイズムには違いないが、この状況ではフェルディナントにも同情の余地がないとは言えない。恋人たちの間に齟齬、軋轢が生じ、相思相愛は背反関係に反転する。

第IV幕の初めで偽手紙を掴まされたフェルディナントは名宛人カルブ侍従長のところへすっ飛んで行く。相手を待つ間の彼の独白：「これは彼女の筆跡だ — 人類がこれまで体験したこともないような前代未聞のどんでもない詐欺だ! — なるほど、国外逃亡にあれほど頑なに反対したのはこのせいだ! — (中略) だからあんな英雄気取りでこの恋を諦めるなんて抜かしたんだな」[傍点引用者](IV.2)

傍点部分は、宰相とヴルムによる偽恋文作戦が実行に移される(III.6)直前の第III幕第4場でフェルディナントがルイーゼに駆け落ち(公国脱出)を持ちかけた際の対話に関わっている。芝居の丁度真ん中に位置するこの対話場面で、宰相の復讐から父親を救うためには恋を諦めるしかないと思いつめるルイーゼと、穢れた遺産の相続と政略結婚から何が何でも逃れたいフェルディナントと、恋人たちの思惑のずれが最も顕著に表れるのである。

フェルディナント：僕の父は苛立っている。僕らにあらゆる攻撃を仕掛けて来るだろう。そうしたら僕は息子としてやってはならない非道な(den unmenschlichen Sohn)こともせざるをえなくなる。もはや子としての義務(meine kindliche Pflicht)を守れなくなる。追い詰められれば怒り狂って、父の犯した殺人の秘密をも暴くことになる。息子が父親を獄卒の手に委ねることになるのだ。[傍点・強調引用者](III.4)

ルイーゼ：貴方には愛より他にもっと大きな義務(Pflicht)がないのですか? (中略) 私には父がいます、たった一人の娘以外には何の財産もない — 明日には60歳になる — 父はきつと宰相様の復讐を受けるのですよ。(中略) 逃げ去った息子を(den entflohenen Sohn)お父上にお返しさせてください — 身分の違う私たちが結ばれば継ぎ目が外れて市民社会はばらばらに砕け散り、世界の永遠の秩序が壊れてしまいます、そんな縁組はどうか諦めさせてください — [傍点・強調引用者](III.4)

フェルディナントが口にした「義務」という言葉はルイーゼの耳には入らなかった。同じ「子としての義務」、孝行の義務でも、息子と娘は逆方向を向いているからだ。父親の犯罪を暴いて獄卒に引き渡すことだけは避けたい、そのためには公国を脱出するしかないフェルディナント、宰相の復讐から父親を護るためには恋を諦めてここに留まるしかないルイーゼ。

会話は噛み合わぬまま以下のような結末を迎える。L=ルイーゼ、F=フェルディナント、LとFの右下の小さな数字は発言順序を示すための便宜上の符号。

L<sub>0</sub>: その愛を私なぞよりもっと貴方にふさわしい高貴なお方に向けてください。 — 涙をこらえながら もう私とお会いになることはありません。 — (中略) さようなら、ヴァルター様

F<sub>0</sub>: 放心状態から醒めて跳び上がり 僕は逃げるぞ、ルイーゼ。ほんとに一緒に来ないんだな?

L<sub>1</sub>: 部屋の奥に座ったまま顔を手で覆って 留まって堪えるよう私の義務が命ずるのです。

F<sub>1</sub>: 蛇め、嘘つき。何か別のものがお前をここに縛り付けているのだ。

L<sub>2</sub>: 心に深く苦しみを秘めた声で そんなふうには思い込まれるのなら — その方がまだ救いがあるかもしれません。

F<sub>2</sub>: 燃えるような愛に対して冷たい義務か! — そんな嘘が通じると思えるのか。 — 誰かオトコがお前を引きとめているのだ、この疑いが当たっていたなら、お前とそのオトコはただではすません。足早に去る [傍点引用者] (III.4)

F<sub>1</sub>及びF<sub>2</sub>の傍点部分(「誰かオトコ」云々)が後の偽恋文作戦の罠に何故フェルディナントが易々と嵌まるかを理解させるための伏線になっていることは明らかであろう。ルイーゼの訴えに対する彼のこうした反応をどう見るか。恋愛至上主義の極端な主観性ゆえに客観的状况が見えなくなった、とする見方<sup>9</sup>が大勢を占めるが。

お父上の許に戻って「貴方にふさわしい高貴なお方」と結ばれてくださいとルイーゼは言うのだが、フェルディナントにとってこれは、領主の愛妾との政略結婚を受け入れ、穢れた遺産を引き継ぎ、墮落した宮廷貴族社会で生きて行け、ということなのだ。娘は青年が最も忌み嫌う生き方を彼に勧め、そのことに気付いていない。青年は恋人の驚くべき無理解に直面して正気を失う。F<sub>2</sub>「誰かオトコがお前を引きとめているのだ」といった妄言はこの判断力麻痺から来ている。青年の錯乱にも同情すべき点があることは認めなければならない。

研究者たちはフェルディナントの独善性を指弾し、ルイーゼの真の姿を見ていないと口をそろえて批判するが、第三幕第四場の対話を見る限り、同じことがルイーゼについても言

<sup>9</sup> Guthke, a.a.O., S. 117 u. a.



えることが分かる。彼女が悪いわけではない。追い詰められた二人は自分の苦しみに囚われて、互いに相手が見えないのである。

#### 4. 何故フェルディナントは畏に掛かるか？ (ii) 偽手紙の中の悪魔的仕掛け

偽手紙において注目すべきは、「恋文」の中であって従来あまり注意を向けられてこなかった次の文章：「お人好しの少佐殿が私の名誉を攻撃から守ろうとなさる様子は滑稽そのものでしたわ。(中略) 吹き出さないためには失神を装うしかありませんでした (Es war possierlich zu sehen, wie der gute Major um meine Ehre sich wehrte. (—) Ich nahm meine Zuflucht zu einer Ohnmacht, daß ich nicht laut lachte.)」[傍点・強調引用者](III.6)

これは宰相がミラーの家に踏み込んでルイーゼを「売女」などと侮辱し、フェルディナントが父親に抗議した第II幕第5場の出来事を指している。

ポイントは名誉(Ehre=処女性)。純潔をフェルディナントが神聖視していることは、メトレッセとの政略結婚に対する父親への抗議によく表れていた。「どんな身分の低い職人といえども瑕のない体を婚資として受け取る(einen ganzen Körper zum Mitgift bekommt)というのに、(メトレッセなど娶れば)その者たちに対してさえ面目が立ちません(中略)私の名誉(Meine Ehre)は、父上、もし名誉を私から奪おうとなさるのであれば、私に命を授けられたのは軽率な戯れだったことになり、私は父上を女衒として呪わねばならない」[傍点引用者](I.7) 穢れた身体そのものであるメトレッセに名誉などない、そういう女を娶ることを彼は「恥辱(Schande)」(=名誉喪失)と呼んでいる。

手紙を口述したのはヴルムだが、書いたのは宰相以外にありえない。<sup>10</sup> 息子の口から純潔尊崇をいやというほど聞かされた宰相は、息子の身上とする価値観を恋人ルイーゼが嘲笑う文章を書き込んだ。これを読めば、息子はきつと逆上して我を忘れるにちがいない。悪魔的ともいべき策略は見事に功を奏し、深く傷ついたフェルディナントは「裏切り」を疑う余裕をなくした。「あの娘の純潔が汚されて(nicht rein mehr)いたらどうする？ 畜生め！俺が崇めていたところを(wo ich anbetete) お前がなぐさんだのか？ ますますいきり立って俺が神聖侵さざるものと尊んでいた場所で(wo ich einen Gott mich fühlte)<sup>11</sup> お前は快樂を食ったのか？(中略) お前はあの娘とどこまで行ったのだ？」[傍点引用者](IV.3) と侍従長を狂気のように問い詰める。

現代ドイツの研究者にとって名誉や純潔は滑稽でしかない。「恋人の仲を引き裂くたくらみは墮落した貴族社会への批判になっているが、同時に、処女性崇拜(Doktrin der weiblichen Unschuld)のような市民社会の絶対主義的愛の理念(dem bürgerlichen 'absolutistischen' Liebeskonzept)の根底に暴力的なものが潜んでいることも暴き出されている。偽手紙を拾っ

<sup>10</sup> 偽手紙の計略はヴルムの発案だが、文面までもヴルムによるものであるかのような言説が見られるのはテキストを綿密に読んでいない証拠で、恥ずかしいことである。

<sup>11</sup> 場所を表す関係詞 wo が使われているのは「ある第三の場所」との関連を示唆している。

たフェルディナントは我を忘れて、恋人の純潔が汚されたかどうかをひたすら気に掛ける。  
(中略) 処女性への拘りなどという夢想的強迫観念(eine phantasmagorische Obsession)が現実  
を見えなくする元凶であることをシラー劇は白日の下に曝して見せた」<sup>12</sup> 要するに処女性  
などという夢幻ゆめまぼろしに狐憑きみたいに拘るから現実が見えなくなるのだと言うのである。

だが現代人の視点から過去の文学の登場人物を批判するよりも、このテクニストが細部に  
直って極めて緻密に織り上げられている事実の方に注意を向けるのが先であろう。<sup>13</sup> フ  
ェルディナントが何故あのように見え透いた偽恋文作戦の罠に易々と掛かってしまうのか  
という疑問、この芝居のリアリティーにとってのアキレス腱ともなりかねない難所にシラ  
ーがどう挑んで、この剣が峰を乗り越えるためにどのような工夫を凝らしたか、筆者の読解  
が的を射ているかどうかは諸賢の判定を俟つかないが、誰もしが抱くはずのこのような  
疑問をテキスト精読によって解き明かそうとする試みこそが必要なのではあるまいか。

政略結婚の計画一つを見ても分る通り、フォン・ヴァルター宰相にとって性は権力強化の  
手段であり、快楽の具であって、息子の口にする神聖だの名誉だのは滑稽以外の何物でもな  
い。宰相は、市民的常識に捉われて純潔に拘るヴルムを揶揄して、貴族の結婚式のあられも  
ない実態についてこう語っていた。「貨幣なんぞ鑄造所から直接もらおうと銀行から受け取  
ろうとどちらだっかまわんではないか。(中略) 当地の貴族社会において婚礼が執り行わ  
れるとなると、ほとんどの場合、招待客、いや給仕どもも含めてじゃが、彼らの少なくとも  
半ダースは、花婿殿のパラダイスを隅から隅まで知り尽くしておるのじゃよ」(I.5)

父子・兄弟はしばしば相手を反面教師として、陰と陽、裏と表の関係になる。<sup>14</sup> なりふ  
りかまわぬ権力志向に対してだけでなく、女性観やエロスに関しても、父親の価値観があま  
りにも放埒、道具的、器官的、乱婚的であるが故に、息子は極度に禁欲的、精神的となる。  
父親が純潔など問題にしない分、息子はこれを重んじる。シラーがフォン・ヴァルター宰相  
の価値観に対して批判的であることは、上に紹介した宰相の発言(I.5, I.7)に見られる喜劇的  
風刺性から明らかであるが、フェルディナントについてはどうか、後に述べたい。

フェルディナントはついにピストルまで突き付けて真相を聞き出そうとする。堪りかね  
た侍従長は内幕を白状し始めるのだが、激昂する青年は *Ihr Vater*(貴方のお父上)(IV.3)を「彼  
女の父親」と取ってしまい、<sup>15</sup> 偽手紙についての思い込みが解けないまま、最終幕に突入す

<sup>12</sup> Schöblier, Franziska. *Einführung in das bürgerliche Trauerspiel und das soziale Drama*. Kindle Version, 2015, S. 61.

<sup>13</sup> Norbert Oellers は「前二作と同様『たくらみと恋』においても、厳密な動機付けや論理性にはあまり注意が払われず(中略) 墮落しきって嘘偽りに満ちた世界に対する激しい抗議」にこそ重点が置かれていると述べているが、この指摘は間違っている。Oellers, Norbert: *Schiller: Elend der Geschichte, Glanz der Kunst*. Stuttgart 2005, S. 171.

<sup>14</sup> Brecht の *Mutter Courage und ihre Kinder* の母と息子・娘はまさにその適例である。

<sup>15</sup> ここで誤解が解けてしまうと、その後の悲劇的展開は起こりえない。*Ihr Vater* のトリックはフェルディナントの尋常ならざる精神状態を示すと同時に、作劇上の工夫を兼ねている。邦訳は分かれる。実吉捷郎は劇の進行に配慮して *Ihr Vater* を「あの娘の父親」と敢えて誤

る。

## 5. 心中書簡破棄が暴く父娘関係の歪み・母(妻)の不在・家父長制の暗部

第 V 幕第 1 場ではルイーゼがフェルディナントを心中へと誘う手紙を書く。父親のために恋人を諦める覚悟でいたのに何故ここに来て急に変わったのか。

直前の第 IV 幕第 7 場で対決したレディ・ミルフォードから脅したり賺したりしてフェルディナントを諦めるよう迫られたルイーゼはこう言い返した：「彼を婚礼の祭壇に攫って行くがいいでしょう — ただ忘れないでください，新郎新婦のキスの間に自害した私が亡霊となつて割り込んで見せますから(zwischen Ihren Brautkuß das Gespenst einer Selbstmörderin stürzen wird)」[傍点・強調引用者](IV.7)

手強い恋敵レディ・ミルフォードとの熾烈な対決が彼女の中で眠りかけていた恋の情熱を再び燃え上がらせ、思わず口を突いて出た„Selbstmörderin“という言葉、これが引き金となった。死んだってフェルディナントを他の女になんか渡すものか。同じ死ぬならいっそのこと秘密をすべて打ち明け誤解を解いて愛を確信しあつて一緒に死のう。秘密を守るという「誓いは生きている者をしか縛れない，死んでしまえば誓いの鉄の鎖だつて溶けてしまう」(V.1) 偽手紙の秘密を明かさないと強制された「神かけての誓い」，そこから逃れるには死ぬしかないという町娘の思い，この愚直なまでの信仰心のいたまじさ，これこそシラーが「誓い」のモチーフを入れることで訴えたかった第二のことではなかっただろうか。誓いの鉄の鎖は死によってしか破れないという痛々しい覚悟と，「この世では諦めるほかない」(I.3) 愛は死の彼方においてしか成就しえないという一途な思いとが一つに溶け合つての心中書簡となる。

だが彼女はこの書面を，偽手紙のお蔭で釈放してもらつた父親に託してフェルディナントの許に届けてくれるよう頼むのである。これでは父親に検閲を仰いでいるのと同じである。

胸騒ぎを覚えた父親は許しを請うて中身を読み，娘が死ぬ覚悟であることを知つて，必死で止めにかかる。自殺を大罪と諭し戒めるのは父親として当然であろう。しかし「わしはお前を神のように崇めていた(Du warst mein Abgott)」「わしにとってお前はすべてだった」「好きにするがいい。あのかうこいい若者に身を捧げるがいい，(中略)あの若者のキスの方が父親の涙より熱いというなら — 死んでしまえ！」 [傍点引用者] (V.1) となると異様である。

第 I 幕でミラーは，ルイーゼにぞっこんのヴルムを相手に「娘が，恋人と別れるくらいな

---

訳し (たくみと恋，岩波文庫，2008 年[初版 1934 年]，112 頁)，番匠谷英一は「あなたの父上が，あなたご自身の実の父上が」と直訳して，フェルディナントが「父親めが娘を貴様に取りもつたというのか」と受ける形にしている(たくらみと恋，世界文学大系，筑摩書房 1959 年，238 頁)が，これは少し無理があるように感じる。

ら両親なんぞ悪魔にくれてやると言ったり、娘が父親の前に土下座して後生だから恋人と添わせてくれ、そうでなきゃ死なせてくれと頼むくらいにやって見せろ、それでこそ男だ、それこそが恋つてもんだ」[傍点引用者](I.2)と言っていた。ルーゼを惹きつける魅力などないヴルムを撃退するにはこれが有効だった。だが実際に「かっこいい若者」が現れて、自分が言った通りのことが起きてしまうと、恋人と父親とどちらが大事かと、手の平返しをやる。狙いは一つ、愛娘を手放さないことである。

父親とフェルディナントの板挟みで娘は苦悶する。嘘をつき続けることは罪だし苦しい、だが恋しい人と心中すれば自殺の大罪の上に、老いた父親を見捨てるという罪をも犯すことになる。「どちらに決めても罪びと」(V.1), 切羽詰まった彼女はついに手紙を破り捨てる。

これを見た父親の喜びようがまた常軌を逸している。

ミラー：狂喜してルーゼの首に縫りつく それでこそわしの娘じゃ。顔を上げて！恋人を失った分、父親を幸せにしてくれたのだ。笑いと涙の中で娘を掻き抱き（中略）わしのルーゼ、天にも昇る気持ちだ！[直訳:わしの天国!](Meine Luise, mein Himmelreich!) (V.1)

悪い噂が立ってしまったこんな町にはもう住めないと言うルーゼにミラーは、

どこへなりともお前の望むところへ行こう。どこへ行こうとパンは神様が恵んでくださる（中略）お前の悲しい物語に曲を付けて、父親のために恋を捨てた娘の歌を歌うのだ。このバラードを歌いながら戸口から戸口へと物乞いして歩く、涙する人たちが恵んでくれるパンは美味しかろう。(V.1)

ここにはインセチュアスな匂いが漂う。「ねばつくやさしさは怒り狂う権力より野蛮よ、身動き取れないわ！(Daß die Zärtlichkeit noch barbarischer zwingt als Tyrannenwut!）」(V.1)とルーゼは嘆く。この叫びからは父親の溺愛に対する厭悪感が聞き取れる。

ドイツ市民劇においては概して母親は不在か、居ても存在感が薄いか、あるいは愚かでマイナスの働きをするか<sup>16</sup>、いずれかである。ミラーのおかみさんは第II幕までで姿を消し、この父娘の会話においても完全に忘れ去られている。<sup>17</sup> 母(妻)の不在がミラー父娘の関係を

---

<sup>16</sup> 愚かな母親の代表は L. Wagner: *Die Kindermörderin* の Frau Humbrechtであろうが、『エミーリア・ガロッチェ』で夫から「浅はかな愚かな母親よ！(eitle, törichte Mutter!）」と叱責されるクラウディアもまたその典型と言える。彼女がエミーリアをグリマルディの夜会に連れて行き、好色な領主ヘットーレ・ゴンツァーガの目に触れさせたしまったことが悲劇の発端となる。その後彼女がとった不適切極まる対応によって悲劇の流れは決定的となる。Vgl. 拙論: 不条理復讐劇『エミーリア・ガロッチェ』 広島ドイツ文学34号 83頁～89頁

<sup>17</sup> Luserke-Jaqui は市民家庭における母の存在の希薄さを指摘し、ミラー夫人をクラウディア

歪め、病的なものにしている。

ルイーゼは若く美しい娘であるが、父親ミラーには近親のタブーが懸かっている。代わりに我が娘を神のように崇め、恋人を捨てて父親を選ばせるという倒錯的な愛情の形が生まれる。父親がやっているのは、タブーで禁じられた性的関係の補償・代替としての言葉によるレイプに等しい。母親(妻)不在、母(妻)の存在の希薄さという形で夫婦関係が正常に機能していないことのこれが結果である。

フォン・ヴァルター父子の関係も母(妻)の不在によって歪められている。父親が息子にあのような政略結婚を押し付けるとするのは、間に入って和ませ、癒し、宥め、諫める役割を果たすべき仲裁者としての母がもし居れば、起こり得ないことであろう。母の不在によって、父子の関係は陰しく非妥協的なものとなる。宰相の異常なまでの権力志向も優しいエロスの欠如から来る破壊的特性を帯びている。

父親たちに共通しているのは若い男女の真摯な愛(エロス)に対する無理解である。自分たちが獣的な性欲の満足しか知らないまま父親になってしまったからである。ミラーは第I幕でフェルディナントとルイーゼの関係を心配して「あの娘は綺麗だ — すらっとしている — 足も可愛い。オツムの出来なんざあどうだっていいんだ。お前たち女についちゃそういうところは誰も見ちゃいない、体の方さえ申し分なきやいいんだよ」(I.1)と言っている。宰相の方もこれに劣らないことは既に見た通り。

このシラー劇が暴いて見せたのは絶対主義体制下における権力の腐敗と横暴だけではない。ドイツ父権性社会・家父長的家庭における母親不在という根本的病弊と、そこから来る破壊的作用をも剔抉して見せたのである。

## 6. 心中 (gemeinsamer Liebestod) は成立したか？

ミラーが、父親のために恋人を捨てた哀れな娘のバラードを父娘で歌いながら異国の地を物乞いして歩くという倒錯的な夢を陶然と語っているところへフェルディナントが姿を現す。偽手紙を掴まされて後、彼がルイーゼに会うのはこれが初めて。件の「恋文」を突き付けて、これを本当に自身で書いたかを問い質し、その返事如何では共に死のうと心に決めてやって来た。日本で言うところの無理心中である。注目すべきは次の台詞。

「とうとう僕の夢がかなう時が来たのだ。僕たちの恋の厄介な障害になっていたレディ・ミルフォードが今ちょうど公国を去って行くところだ。父は僕の決めた結婚を許すと喜んでくれている。(中略)僕たちに運が向いてきたのだ。僕は約束を果たしに来た、お前

---

ア・ガロッチィの後裔と見なしている。Vgl. Luserke-Jaqui, a.a.O., S. 77f. 確かにミラーのおかみさんは、ルイーゼがそのうちどこかの「奥方様(gnädige Madam)」になるかもしれぬなどと口にして、手強い恋敵の出現に不安を覚えたヴルムが宰相に御子息の身分差恋愛を告げ口するきっかけを作るが、ネガティブな働きの度合いにおいては到底クラウディア・ガロッチィの比ではない。

を花嫁として祭壇に連れて行くっていう約束を」[傍点引用者](V.2)

前メトレッセについてはその通りである。だが傍点部分は説明を要する。これは第IV幕第5場での父子のやりとりを踏まえている。そこでは、偽手紙を本物と信じ込んだ息子が父親にルイーゼの「不実」を嘆き、彼女の「正体」をいち早く見抜いた父の慧眼を讃えた。この分だとあの娘をいくら褒め上げても危険はないと見て取ったフォン・ヴァルター男爵はルイーゼをさんざん褒め称え、「あの娘を娶るがよい」(IV.5)と息子を焚きつけたのである。こうしておけば問題はあの「恋文」だけ、息子はきっとあの手紙の真偽を確かめようと躍起になってあの娘を責め苛むに違いない。だが下々の者たちはいったん誓ったからには、その純朴さと信仰心ゆえに口を割ることはありえない。「裏切り」に傷ついた息子はきっとルイーゼを呪い、諦めるほかなくなるだろう。こう読んだ父親は気前のいい口約束で息子を噓けたのである。テクスト構成の用意周到ぶりはここにも見て取れる。

父親の思惑通り、結婚の障害はあの恋文だけと思込んだフェルディナントはいよいよ激しくルイーゼを問い糾す。「この手紙はお前が書いたのか？(Schriebst du diesen Brief?)」を四度繰り返す。最初の問いの際ミラーは「娘に言い聞かせるように 頼むから、ルイーゼ、忘れるなよ！忘れるなよ！(warnend zu Luisen. Um Gotteswillen, Tochter! Vergiß nicht! Vergiß nicht!)」(V.2)と言う。秘密がバレれば彼自身が再び収監され裁きに懸けられることになる。だから娘に圧力をかけるのである。この時ルイーゼは「ああこの手紙はね、お父さん」と、ほんとのことを言いそうになるが、フェルディナントが早まって口を出し、再び「この手紙はお前が書いたのか？」と繰り返す。ミラーもまた「脇から彼女に懇願するように しっかりするんだ！しっかり！ルイーゼ！一度そうですと言ってしまうば、すべて乗り切れるんだ」(V.2)

この場面を演出し、操っているのはまたしても二人の父親たちなのである。

板挟みになって苦悶するルイーゼに追い打ちをかけるようにフェルディナントは「神に懸けて誓え！嘘を許さぬ神に懸けて！(Schwöre bei Gott! bei dem fürchterlich wahren!) この手紙はお前が書いたのか？」(V.2) 偽手紙を口述筆記させられた時にも彼女は「この手紙を自分の意志で書いたものと神に懸けて誓(das Sakrament darauf nehmen)」(III.6)わされた。しかし「心中書簡」を破棄した時点でもう心は決まっている。ルイーゼは「父親と目と目を合わせつつ苦しみに満ちた闘いの後できっぱりと 私が書きました」(V.2)

落胆したフェルディナントはもう一度真偽を確かめた後、渴きを訴えてルイーゼにレモナードを所望し、隠し持った毒を混ぜ、先ず自分で飲んだ後ルイーゼにも勧める。

...だがその前に、第V幕第1場でルイーゼがフェルディナントに宛てて書いた手紙、恋人を心中へと誘う手紙、父親の反対に遭って破棄された手紙、そこには何が書かれてあったか。

貴方は騙されておいでです、フェルディナント — 考えられないようなたくらみが私たちの心を引き裂いたのです、でも私は真相を明かせない、おそろしい誓いに縛られて。それにあなたのお父上の命令で至る所に密偵の目が光っています。もし貴方に勇氣があれば、フェルディナント — 私はある第三の場所を知っています、そこではどんな誓いも無効となり、どんな回し者も来ることはありません。どうか真つ暗な道を歩む勇氣をお持ちになってください、貴方の道行を照らすのは貴方のルイーゼと神様のみ — ただ愛一筋にお越しください(eine finstre Straße zu wandeln, wo dir nichts leuchtet als deine Luise und Gott — Ganz nur Liebe muß du kommen), 現世の望みも願いもすべてかなぐり捨てて、ただお心のみを頼りに。どうかもしそのお気持ちならば — カルメル会修道院の塔の鐘が 12 の刻を告げる時にご出立ください。(一)[傍点引用者](V.1)

ギクッとするのは「ある第三の場所」、第 I 幕第 7 場でフォン・ヴァルター宰相が息子に政略結婚を勧める際に使ったのと同じ言葉である。父親は「ある第三の場所をご領主様と交互に占めるという光栄」と言い、息子は「君主といえども獣同然になり果てる場所」と言っていた「公言をはばかれる身体の一部」である。同じ言葉が恋人を心中に誘うルイーゼの手紙に出て来るのだ。シラーが意識していなかったはずはない。

「ある第三の場所」とは何かと訊かれたルイーゼはしばし言いよどんだ後、初めは「お墓(das Grab)よ」と言い、しばらくして「そこには新婚の床(ein Brautbett)があるの、その上に朝日が金色のカーペットを広げ、春が色とりどりの花飾りをふり撒いてくれるの。(中略) 死(Tod)は優しく可愛く匂い立つような少年、絵に描かれた愛の神(Liebesgott)みたいな、でも意地悪じゃないわ、おとなしくて親切な精霊よ、(中略) 時のお堀を向こう岸へと渡してくれて、永遠に壮麗な精霊の城の門を開き、にこやかに頷きながら消えてゆく」[傍点引用者](V.1)<sup>18</sup>

ルイーゼは彼岸に待ち受ける「新婚の床」へと恋人を誘っているのである。手紙の傍点を施した箇所がほとんど愛の行為の描写を思わせるのも道理である。二つの「ある第三の場所」は共にエロスだが、これを現世(穢土)から彼岸(浄土)へと追いやったのは何か。要因は幾つかあるが、中でも宰相のあくなき権力欲、恋人たちの仲を裂き、権力を維持強化するべく政略結婚を成り立たせるための偽手紙であり、その秘密を守らせるための「神かけての誓い」のいたましい呪縛力については既に述べたとおり。だがこのたくらみが成功したのは、フェルディナントの処女性崇拜という枢要を衝いた宰相の作戦が当たったからでもある。息子のいささか極端な純潔神聖視が心中の要因の一つということになる。だがこれは父親のあまりにも放埒で、道具的、器官的なエロス観の裏返しであり、偽手紙の問題個所の根底には性愛に関して背反する父子の価値観の軋轢があって、そのいずれにも居場所を見出し得ないエロスが彼岸の光に包まれた「新婚の床」へと逃れるしかなかった、という事情が見

<sup>18</sup> お墓=新婚の床、エロスとタナトスの究極の一致が示唆されているのは明らか。

て取れよう。汚れた権力志向に対してだけでなく、女性観やエロスについても、息子は父親の逆を行こうとするあまり極端に走り過ぎるきらいがある。シラーの批判は両者に向けられている。

ルイーゼの心中書簡は父親に阻止されることで家父長的市民家庭の歪んだ父娘関係や母親不在という問題を暴くきっかけになっただけではなく、また、封建的身分制社会における権力の暴虐を糾弾する役割を果たしただけでもなく、当時の性やエロスに対する態度や考え方への問題提起にもなっている。フォン・ヴァルター父子のどちらをも肯定できないとすれば、第三の価値観はどこにあるのか、問い掛けはなされているが、劇中に答えは見いだせない。

和独辞典で「心中」は *gemeinsamer Selbstmord* (od. *Freitod*) である。19 世紀後半になってワーグナーが *Liebestod* という言葉を創出した。トリスタンの亡骸を前に歌いつつ死んで行くイゾルデ。邦訳は「愛の死」だが、＜後追心中＞とした方が分かり易い。西欧ではこの形が多い。シラーが自らの劇のお手本にしたとされる『ロミオとジュリエット』もそうだ。仮死状態にあるジュリエットを死んだと思い違えたロミオが毒を仰ぎ、目覚めたジュリエットは傍に横たわるロミオの死を嘆いて短剣を胸に刺して果てる。ダブルの＜後追心中＞である。『曾根崎心中』でもそうだが、心中ではたいてい男が女を殺したあと自殺する。このシェイクスピア劇にはその凄惨な場面がない。これが感動を呼ぶ理由の一つであろう。

ルイーゼ/フェルディナントはどうか。恋人に宛てたルイーゼの手紙が父親の反対に遭って破棄されなければ、*gemeinsamer Liebestod* が成立した可能性はある。しかし実際に起きるのはルイーゼの「不実」に絶望した青年による無理心中である。熱愛は裏を返せば独占欲、恋人を諦めるくらいなら殺すのだ、と *Schöblier* は解説するが...<sup>19</sup>。青年は確かに、「あの娘は私のもの(Das Mädchen ist mein!)」、自分に彼女を裁かせてほしいと「裁きの神(Richter der Welt)」に許しを乞うている。だが、その裁きは、二人一緒に地獄に墮ちて共に受ける永劫の罰であり、これが彼にとっての永遠の婚姻なのだ。

永劫に亘って彼女とともに同じ責め苦の車輪に括り付けられ — 互いの目に根を降ろしたみたいに睨み合い — 髪と髪を互いに逆立たせ — 互いのうつろな呻き声すら一つに溶け合わせ — こうなっても私は愛撫を繰り返し、彼女の誓いを歌って聞かせるのだ — おお、何という恐ろしい婚姻か、だがこの結婚は永遠なのだ！ [傍点・強調引用者](IV.4)

強調されているのは、最初の„Eine Ewigkeit mit ihr auf ein Rad der Verdammnis geflochten“という一文が示しているとおり、地獄の劫罰の車輪の上であろうとも、永遠に共に一つ、ということ。現世においても叶わぬ、来世の楽土においても叶わぬ婚姻であるならば、地獄だつてかまうものか、そこで挙げて見せる、とフェルディナントは言っているのである。

---

<sup>19</sup> *Schöblier*, a.a.O., S. 61.



既に述べた通りルイーゼはレディ・ミルフォードからフェルディナントを諦めるよう迫られた時「彼を婚礼の祭壇に攫って行くがいいでしょう — ただ忘れないでください、新郎新婦のキスの間に自害した私が亡霊となって割り込んで見せますから」(IV.7)と言い、その直後に心中書簡を書いている。その時点で彼女はまた死をもってしても恋をまっとうしようと思っていた。父の反対に遭って心中を思い止まらされたルイーゼは愛の妄執から抜け出たように見えるが、フェルディナントは最後までそれを捨てきれなかった。

用意されたレモナードに毒を入れて先にそれを仰ぐのはフェルディナント、勧められて後から飲んだルイーゼの方が先に逝く。間もなく命果てると告げられたルイーゼは「誓い」の呪縛から解放されて真実を打ち明け、疑念が晴れて再び愛を確信できたフェルディナントは „Gottlob! jetzt hab ich *all meine Mannheit* wieder.“[強調引用者]、最後は „Luise — Luise — Ich komme — Lebt wohl — Laßt mich an diesem Altar verscheiden —“ (V. Letzte Szene) と言って後を追う。フェルディナントにとって無理心中が *Liebested* <後迫心中> に変わった瞬間である。注目すべきは *Altar* (祭壇)、フェルディナントが「この祭壇の許で死なせてくれ」[傍点引用者] と言った後「少佐はルイーゼの傍らに横たえられる」(V. Letzte Szene) とト書きにあるところを見ると、祭壇は恋人ルイーゼその人。ルイーゼの手紙にある「ある第三の場所」、彼岸に待ち受ける *Brautbett*, 「後の世も なほしも一つ蓮<sup>はちす</sup>ぞや」<sup>20</sup> である。<sup>21</sup>

だがルイーゼの方はどうだったか。一旦は心中を決意しながら、反対され説得されて恋を諦めて生きることを決意した彼女は毒を飲んだと知らされた時、死の恐怖に戦き、後に残る両親のことを思いやり、「哀れな一人ぼちの私のお父さん」と嘆く。「もう助からない、間もなくあの世に行く — だが心配するな。二人一緒に旅立つのだ」(V.7) と告げられた時は期せずして彼女にとっても心中の夢が甦り、願いの一部がかなったのかもしれない。「おお— もう黙っていることなんて出来ない — 死ぬのよ — 死ぬとなればどんな誓いだって無効よ<sup>22</sup> (中略) 私が嘘をついたのは人生でただ一度 (中略) 侍従長に手紙を書いた時だけ (中略) 心にもない汚らしい嘘を書かされた、書かせたのは貴方のお父様 —」(V.7) と胸の痞えを吐き出し、恋人に真実を告げることが出来た。だが怒りに駆られて剣を取って立ち上がるろうとするフェルディナントを「やめて! 何をなさるのです? 貴方のお父様なのですよ」と諫め、「イエス様は死を前に(敵を)お赦しになった。貴方とお父様に救いがありますように (Sterbend vergab mein Erlöser — Heil über dich und ihn. *Sie stirbt.*)」[傍点引用者](V.7)。これが

<sup>20</sup> 近松門左衛門、曾根崎心中、新潮日本古典集成 近松門左衛門集 信多純一 稿注 新潮社 1986年 (71頁-104頁) 99頁。

<sup>21</sup> フェルディナントは死においても自己陶酔的、いささか身勝手である。しかしそれは彼の純真さ(イノセント)の表れと受け取るべきであろう。若い二人には常にいたましが付きまとう。

<sup>22</sup> この台詞にも愚直な信仰心のいじらしさ、いたましが表現されていると見るべきである。

彼女の最期の言葉となる。<sup>23</sup>

ルイーゼは死に瀕してもなお他を思いやる気持ちを捨てなかった。「愛の祭壇」ではなく、「私は無実のまま死ぬのです(Ich sterbe unschuldig<sup>24</sup>)」(V.7)と言うように、罪なくして十字架に架けられたイエスに擬せられている。そして、自分に害をなしたフォン・ヴァルター父子の身を思い遣り、彼らに救いがありますようにと祈る。これはキリストのまねびを実践しつつ死んで行くということであって、Liebestodではない。

石川實はFritz Martiniを援用しつつ「心中による愛の成就」<sup>25</sup>を謳っているが、テキストを入念に読めば、恋人たちがその死においても行き違ったことを認めざるを得ない。

Liebestodという言葉がこの劇について初めて使ったのはBrechtである。<sup>26</sup>しかし上に述べたとおり、フェルディナントに関しては<後追心中>が成立したと言えるが、ルイーゼの死はLiebestodとは異次元のものである。父親の介入は家父長的家庭の問題性を暴いただけではない。「愛一筋に」恋人と共に死んで彼岸の「新婚の床」で結ばれるという心中の夢が親を見捨てるという大罪でもあることをルイーゼは改めて思い知らされた。それと同時に、「横暴な権力よりも野蛮な「ねばつくやさしさ」(V.1)という父親の執着心の浅ましきにも気付かされた。行動の出口をすべて塞がれた彼女は自らの愛執も含めて、煩惱悶ぎ合う濁世から抜け出るしかなかった。最も多くの苦しみを受けたルイーゼは最後、変容(Verklärung)し、聖別され聖女として、あるいは、ありとあらゆる人間的罪業を背負い、それに押し潰されるようにして死んだ。原題が*Louise Millerin*であった理由はそこにあるのであろう。

父親の干渉によってgemeinsamer Liebestod(心中)という感動的結末が阻止され、それと絡んで様々な問題が提起された結果、観客の感情移入は妨げられた。Brechtにとっては皮肉なことに、彼の理論とは別の形でかもしれないが、Verfremdungseffekt(異化作用)が作動したのである。

もう一人の重要人物レディ・ミルフォードも気丈さと潔さの点でルイーゼに負けてはいない。恋敵としてルイーゼと対決した段階では彼女もまだ妄執に取り憑かれていたが、16歳の町娘のひたむきな言葉に衝撃を受け、しばしの迷誤の後、一切の未練執着を断ち切り、無

<sup>23</sup> フェルディナントが今際の際に父に和解の手を差し伸べ、父が「息子は赦してくれた」(V. Letzte Szene)と言って司直の手に身を委ねる幕切れは、ルイーゼの最期の言葉が文字通り das letzte Wort behaltenしたことを示している。

<sup>24</sup> ルイーゼがすべての点で「罪がなかった」と言えるかどうかは議論の余地のあるところであろう。しかし、無理心中の原因となった裏切りの手紙に関しては無実であり、ここで彼女が言っているのはそのことである。

<sup>25</sup> 石川實:『たくらみと恋』(南大路振一他編著『ドイツ市民劇研究』三修社、1986年所載)、379頁。なおこれは優れた研究書であり、刊行から35年以上を経た今日でも学ぶべきところが多い。石川論文もドイツ人学者たちによる先行研究を批判的に検討しつつ結論を導き出す、目配りの利いた立派な研究である。だが、独自の視点からの問題設定や新しい解釈への挑戦が見られないのは物足りない。これは日本人学徒の研究全般について今日なお見られる傾向である。

<sup>26</sup> Vgl. Schafarschik, a.a.O., S. 132. 他にも Koopmann, Helmut: *Schiller Handbuch*, Stuttgart: Kröner 2011, S. 385.

一物となって公国を去る。(IV.9)

父権制秩序の下で女たちは常に被抑圧者、欲望充足を抑えられる立場にあって、男性中心の現世的栄華や歓楽から距離を置いて、それをあさましいと観じ、男たちよりもきっぱりと諦めの境地に至ることが出来たのかもしれない。それはそれで悲しいことであるが。

フェルディナントの目指した身分差恋愛結婚は意図するとなしにかかわらず、父親の(父権的)体制への反乱であった。地位と権益を護るため権力者はなりふりかまわぬ策を用いて妨害を試みたが、欺かれて「怒り狂う恋 (die zürnende Liebe)」(V. Letzte Szene)には勝てなかった。ルイーゼも心中を思った時は「愛は悪意より抜け目なくて大胆なの (中略) あの人は頭で考えている間は狡賢いでしょうけど、ハートが相手だと勝手が分からないのよ」(V.1)と言っていた。権力者の狡知も恋の情熱は予測不可能で歯が立たなかった。フォン・ヴァルター男爵は跡継ぎを失い、宰相の座から転落させられた。もう一人の父親ミラーもただの被害者というにはとどまらない。もし無理心中の道連れにされなかったとしても、ルイーゼが父親の傍らに留まって幸福な人生を送れたかどうかは疑わしい。「ねばつく優しさで」「横暴な権力よりも野蛮」に娘を独り占めしようとした市井の父親は最愛の一人娘を失うという罰を下されたのである。父権的な貴族の体制も家父長的市民の家庭もともに断罪され瓦解した。

## „Kabale und Liebe“ — Der fein und präzis gewebte Text

Tomotaka TAKEDA

Der junge Baron Ferdinand von Walter liebt Luise Miller, ein bürgerliches Mädchen, leidenschaftlich und bittet um ihre Hand, ohne ihre Unschuld zu beflecken, was in der damaligen Literatur eine Ausnahme ist. In diesem Drama handelt es sich nicht nur um unstandesgemäße Liebe, sondern um eine Mesalliance, die ihn aus der höfischen Welt ausschließen wird, was seinen Erwartungen völlig entspricht. Er sagt zu ihr: „Ich bin des Präsidenten Sohn. Eben darum. Wer, als die Liebe, kann mir die Flüche verstüßen, die mir der Landeswucher meines Vaters vermachen wird?“, und dem Vater gegenüber: „Feierlich entsag ich hier einem Erbe, das mich nur an einen abscheulichen Vater erinnert.“ Mit der Heirat kann er den verdorbenen adligen Kreis verlassen und sich von der blutbefleckten Erbschaft befreien, was aber für seinen Vater bedeutet, dass er Gefahr läuft, seinen Erben und die Macht zu verlieren. Um seinen Einfluss am Hof zu sichern, will der Präsident seinen Sohn mit Lady Milford, der Favoritin des Fürsten, verheiraten. Es kommt darauf an, den Bund der Liebenden zu zerreißen. Der Präsident nimmt den Schlaupopf Wurm, den Sekretär, zur Hilfe. Der rät, zuerst müsse man Luises Eltern verhaften und einsperren lassen, dann solle das Mädchen zur

Befreiung der Eltern einen fingierten Liebesbrief an eine dritte Person schreiben und „das Sakrament darauf nehmen, diesen Brief für einen freiwilligen zu erkennen“; den Brief spiele man dann „mit guter Art dem Major in die Hände.“

Ferdinand geht in die plumpe Falle, aber warum und wie? Wurm sagt: „Herr Major ist in der Eifersucht schrecklich wie in der Liebe.“ Man spricht von dem Absolutismus der Liebe, der aristokratischen Hybris, dem hochfahrend-religiösen Liebespathos usw., die ihn verblendeten. Aber auch der genau ausgearbeitete Text, wie er im Folgenden beschrieben wird, darf nicht übersehen werden.

(1) Der Präsident erklärt der Familie Miller, die seine Pläne zerschlagen könnte: „Ich will meinen Haß an eurem Untergang sättigen, die ganze Brut, Vater, Mutter und Tochter, will ich meiner brennenden Rache opfern.“ Jetzt muss das Liebespaar wählen, das eigene Liebesglück oder Ruhe und Frieden der Millers. Luise fällt die Wahl auch wohl schwer, aber nicht so schwer wie ihrem Liebhaber, der die schändliche Ehe zu dritt mit der Favoritin und dem Fürsten eingehen müsste, indem er auf Luises Liebe verzichtete, um ihre Familie vor der Rache seines Vaters zu schützen. Das führt zu einer nicht zu überhörenden Unstimmigkeit zwischen ihnen. Auf die Liebe, die ihn vor der politisch motivierten schmutzigen Ehe und dem abscheulichen Erbe bewahrt, kann Ferdinand schwer verzichten und er schlägt Luise vor, gemeinsam aus dem Fürstentum fliehen, denn er fürchte sich, dass er angesichts des zu erwartenden heftigen Angriffs seines aufgeregten Vaters das dunkle Geheimnis von dessen Mordtat verraten und ihn so in die Hände des Henkers liefern könnte, was seiner kindlichen Pflicht widerspreche. Luise wendet dagegen ein, wenn sie mit ihm fliehe, sei die Rache des Präsidenten an ihrer Familie furchtbarer. Sie müsse in der Stadt bei ihrem alten Vater bleiben, der nichts anderes besitze als die einzige Tochter. Die kindliche Pietät der beiden bringt sie aufgrund ihrer jeweils ganz anderen Ausgangssituation zu entgegengesetzten Schlussfolgerungen. Luise sagt auch: „Laß mich (—) deinem Vater den entflohenen Sohn wiederschenken! Schenke sie (deine Liebe) einer Edeln und Würdigern!“ Ob aber Ferdinand die Mätresse wirklich heiraten sollte. Luise empfiehlt ihm letztlich das, was er am meisten vermeiden will. Er gerät außer sich, redet wirr: „Schlange, du lügst. Dich fesselt was anders hier. (—) Ein Liebhaber fesselt dich“ (3.4) Diese Stelle deutet auf die folgende tragische Entwicklung voraus.

(2) Bisher kaum beachtet sind die satanischen Sätze, die der Präsident in den gefälschten Liebesbrief eingefügt hat: „Es war possierlich zu sehen, wie der gute Major um meine *Ehre* (Jungfräulichkeit) sich wehrte. (—) Ich nahm meine Zuflucht zu einer Ohnmacht, (—) daß ich nicht laut lachte.“ Als ihm der Vater die Heirat mit der Mätresse gedrängt hatte, hatte der Sohn erwidert: „Mit welchem Gesicht soll ich vor den schlechtesten Handwerker treten, der mit seiner Frau wenigstens doch einen ganzen Körper zum Mitgift bekommt?“ Der Präsident weiß zu gut, dass sein Sohn auf die Ehre, besonders die Ehre der Frauen, hält. Mit den eingefügten Sätzen, in denen Luise genau darüber spottet, trifft er den Sohn am empfindlichsten Punkt. Aus der Fassung gekommen drängt

Ferdinand den Hofmarschall zur Antwort: „Bube! Wenn sie nicht rein mehr ist? Wenn du genossest, wo ich anbetete? (—) Wie weit kamst du mit dem Mädchen? Bekenne!“ Die von dem abgefeimten Politiker erdachten Sätze machen Ferdinand blind und taub.

Im 5. Aufzug schreibt Luise an Ferdinand ein Briefchen, in dem sie ihn zum gemeinsamen Selbstmord auffordert. Warum entschließt sie sich plötzlich dazu, obwohl sie sich doch nicht für Ferdinand, sondern für den Vater entschieden hatte? Als kurz davor im 4. Aufzug Lady Milford von ihr fordert, Ferdinand zu entsagen, entgegnet sie: „Reißen Sie ihn zum Altar – Nur vergessen Sie nicht, daß zwischen Ihren Brautkuß das Gespenst einer *Selbstmörderin* stürzen wird.“ Die mächtige Rivalin reizte sie so, dass ihre Liebe aufs neue aufflammte, und unwillkürlich fährt ihr das Wort „*Selbstmörderin*“ aus dem Mund. Der Selbstmord – der Tod hebe alle Eide auf. Der Eid, mit dem man den Betrug zu versiegeln gedachte, binde nur „die Lebendigen, im Tode schmelze auch der Sakramente eisernes Band“. Das fromme, einfache Mädchen dachte, sie könne erst dann ihm die Wahrheit anvertrauen. Sie träumt von einem „Brautbett“ im Jenseits. Dass ihr Vater sie nachdrücklich vom Selbstmord abzubringen sucht, versteht sich, aber seine Rede klingt befremdlich: „Du warst mein Alles (—) Wenn die Küsse deines Majors heißer brennen als die Tränen deines Vaters – stirb!“ „Daß die Zärtlichkeit noch barbarischer zwingt als Tyrannenwut!“ klagt Luise und zerreißt den Brief. „Miller stürzt ihr freudetrunken an den Hals.“ Er träumt, dass sie zusammen „ein Lied von der Tochter, die, ihren Vater zu ehren, ihr Herz zerriss“, singend von Tür zu Tür betteln gehen. Das riecht stark nach Inzestwunsch und deckt die Perversität der patriarchalischen Familie auf.

Ferdinand ist selbst die Vereinigung im Inferno lieber als die Zwietracht im irdischen Leben. Er vergiftet sich und sie, um eine „Ewigkeit mit ihr auf ein Rad der Verdammnis geflochten“ zu sein. Als Luise sterbend alles erzählt, kann er wieder an ihre Treue glauben und an dem Liebesaltar, neben Luise, verschneiden. Als aber Ferdinand den Degen herausreißt, um sich an seinem eigenen Vater zu rächen, ermahnt Luise ihn zur Vergebung: „Sterbend vergab mein Erlöser — Heil über dich und ihn!“ Sie stirbt nicht den Liebestod, sondern Jesus Christus nachahmend als eine Heilige. Das Drama hieß mit Recht ursprünglich *Louise Millerin*.